



▲城山神社に奉納されている絵馬

背景

昔から「寅年は荒れる」と言われてきましたが、慶応2年（1866）も寅年でした。8月5日から降り続いた雨は、約80年前の天明以来、最大の洪水を引き起こしました。那賀川の南岸では、阿南市上大野から富岡に至るまで各所で堤防決壊や家屋流失などの大被害が生じ、阿南市富岡では30名以上の生命が失われたと記録されています。また、那賀川の北岸では、羽ノ浦町古毛の万代堤が200間（約360m）以上にわたって決壊し、古毛の家々が流失したと言われています。

アクセス 城山神社

- 持井橋より南へ直線距離1.5km
- 阿南市上大野町
- 緯度経度 北緯33度55分33秒, 東経134度34分43秒



那賀川の奥に降った雨が一気に下流を襲ってきました。土手も藪も流して行きました。代々お医者様の岸玄硯先生の家は大野城のふもとにありました。那賀川の水位が上がり、さすがの大きな家も浮いてしまいました。大量の雨水を含んだ大きな葦葺きの屋根の重さのために、家はひっくり返り、バリバリと音を立てて壊れていきました。この時、天の助けか、八畳の天井板がポツカリと目の前に浮かびました。

玄硯先生夫婦、幼い二人の子、年老いた両親、親戚の娘さん、そして婆やさんの八人は天井板に乗り、洪水の中を流れに身を任せて流れて行きました。那賀川の本流は逆巻く流れでしたが、大野辺りになるととゆつくりと流れ、下大野になると八貫から岡川へと流れが変わり、西方の八幡様の馬場の松の枝にも手が届くかとも思われるように流れて行きました。

八人は手を合わせ、普段信仰している城山神社を伏し拝みました。すると、流れること一里（四キロメートル）ようやくにして助かりました。

流れ着いた所は立善寺村（現在の阿南市宝田町）でした。九死に一生を得た家族の歓びは何物にも代えることはできなかつたと思います。家族の歓び、神仏の加護のありがたさを表すために、玄硯先生は漂流の姿を大きな絵馬に仕上げて城山神社に掲げました。